

中国語を母語とする日本語学習者のスピーチレベル とスピーチレベル・シフト : ディスコース・ポライ トネス理論に基づいて

馮, 荷菁

<https://hdl.handle.net/2324/4475215>

出版情報 : 九州大学, 2020, 博士 (学術), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

| | | | | |
|--------|---|------|------|-------|
| 氏 名 | 馮 荷菁 | | | |
| 論 文 名 | 中国語を母語とする日本語学習者のスピーチレベルとスピーチレベル・シフト —ディスコース・ポライトネス理論に基づいて— | | | |
| 論文調査委員 | 主 査 | 九州大学 | 教授 | 井上奈良彦 |
| | 副 査 | 九州大学 | 教授 | 郭俊海 |
| | 副 査 | 九州大学 | 准教授 | 横森大輔 |
| | 副 査 | 九州大学 | 准教授 | 志水俊広 |
| | 副 査 | 九州大学 | 名誉教授 | 松村瑞子 |

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、母語場面と接触場面の談話コーパスデータをもとに、宇佐美まゆみが提唱する「ディスコース・ポライトネス理論」を参考に、中国語を母語とする日本語学習者のスピーチレベルとスピーチレベル・シフトについて、量的・質的双方の観点から考察を行ったものである。日本語母語話者は、相手との人間関係や場面に応じて適切にスピーチレベルを選択し、その切り替えによってコミュニケーションを効果的に進め、人間関係を円滑に保とうとしている。ところが、日本語のような敬語体系とスピーチレベル体系を有しない中国語を母語とする日本語学習者にとって、スピーチレベルを使い分けることは大きな課題であり、基礎研究や比較研究はまだ不十分である。本論文はこの課題に取り組み全 10 章から構成される。

第 1 章では、研究背景、研究目的および理論的枠組みについて述べている。第 2 章では、用語の整理、本研究の用語の定義、先行研究を概観した上で、従来の研究の問題点を指摘し、本研究の課題を提示した。第 3 章では、本研究で用いるデータ、分析単位、コーディング方法、および分析手順を提示した。

第 4 章以降が分析結果とその考察である。第 4 章では、シフトの頻度など数量的な観点から、母語場面と接触場面において女性話者と男性話者が対目上・対同等に使用するスピーチレベルとスピーチレベル・シフトを比較した。第 5 章では、個別のシフトの解釈から、有標行動と捉えられるダウンシフトを取り上げ、母語場面と接触場面の初対面会話におけるダウンシフトの「ポライトネス効果」を分析した。第 6 章では、アンケート調査を通して、中国人日本語学習者のスピーチレベルとスピーチレベル・シフトの使用意識の問題点を分析した。第 7 章では、談話完成テストを通して、日本語母語話者と中国人日本語学習者のスピーチレベル使用を比較し中国人学習者の問題点を分析した。第 8 章では、日本語教科書の分析に基づき、中国人日本語学習者への指導上の問題点を指摘した。第 9 章では、ディスコース・ポライトネス理論を用い、母語場面と接触場面のスピーチレベルとシフトを総合的に考察した。また、中国人学習者の意識・使用実態・指導上の問題点を総合的に考察した。

終章の第 10 章では、本研究の結論として第 2 章で提示した研究課題に対する回答を示し、最後に本研究の意義と今後の課題を述べている。

以上の結果、本研究は、使用したコーパスデータ内において母語場面と接触場面における女性ベ

ース話者と男性ベース話者の共通点と相違点を明らかにすることができた。また、ディスコース・ポライトネス理論に基づいて、両場面のベース話者が使用するダウンシフトがもたらすポライトネス効果を明らかにすることができた。さらに、アンケートによる意識調査、談話完成テスト、教科書分析などによって、中国人学習者の意識・使用実態と指導上の問題点を指摘したことは、先行研究では指摘されることのなかったものである。取り扱ったコーパスデータの特性上、分析結果の一般化には限界はあるものの、それはさらなる研究に期待するものである。全体として、本論文は当該学問分野の発展に貢献するものであり、博士(学術)の学位に値すると審査委員全員が判断した。